

酪農・豆知識 第 44 号

第 9 次家畜改良増殖目標のポイント

農林水産省は平成22年4月21日、10年先の平成32年度の家畜の能力・体型・頭数の目標である新たな「第9次家畜改良増殖目標（案）」を公表し、22年4月30日まで、パブリックコメントを募集し、「第9次家畜改良増殖目標」を策定しました。また、今後の家畜改良は、「高く売れる」「生産量が多い」といった従来の農家側の価値観だけでなく、多様化する最近の消費者ニーズ等を中心に考えています。

これまでの改良、課題および今後の方向

これまでの改良	課題	今後の方向
【全畜種共通】		
<ul style="list-style-type: none"> 肉質、乳量、乳質など生産性や品質向上に着目した改良が進められてきた。 	<ul style="list-style-type: none"> 消費者庁が設置されるなど、消費者意識がますます高まっている。 2006年秋頃から穀物、大豆の国際価格が上昇しており2009年以降の価格は2006年以前に比べ高い水準の価格が続くことが見込まれる。 	<ul style="list-style-type: none"> 消費者ニーズに対応した多様な品質・価格の畜産物供給が図られるよう、地方自治体等と協力して特色ある取組を推進する。 飼料効率の改善に資する取組を推進する。(増体、泌乳持続性など間接的なものも含む)
【乳用牛】		
<ul style="list-style-type: none"> 飼養戸数が減少する中で、1戸当たりの飼養頭数と、1頭当たりの乳量を増加させることで生乳生産の基盤を維持してきた。具体的には、乳量及び乳成分の向上を進めてきた。 	<ul style="list-style-type: none"> 乳量が増加した結果、泌乳ピーク時において、生理的に摂取可能な量を上回るエネルギーが必要となり、受胎率が低下したり疾病が増加する傾向にあることから、乳量に応じたきめ細かな飼養管理が必要となった。 	<ul style="list-style-type: none"> 乳牛への体の負担が減り、繁殖性や飼料効率等の改善が期待できる「泌乳持続性」に関する改良を早期に開始し、乳牛の生涯生産性に着目した経営を推進する。
【肉用牛】		
<ul style="list-style-type: none"> 平成3年の牛肉輸入自由化以前は体型、肉量（増体）中心の改良を行ってきたが、平成3年以降は、輸入牛肉との差別化のため、肉量重視から肉質（脂肪交雑）重視へと転換した。 	<ul style="list-style-type: none"> 脂肪交雑の改良が顕著に進む一方で脂肪交雑を増加させることを重視した飼養管理に伴い、肥育期間は横ばい。 	<ul style="list-style-type: none"> 改良の重点を脂肪交雑から増体等に移し、従来の脂肪交雑志向の経営に加え、低コストで適度な脂肪交雑を目指す経営を推進し、消費者の選択の幅の拡大を図る。 遺伝的多様性に配慮した種畜の選抜を推進する。

乳牛の10年後のイメージ

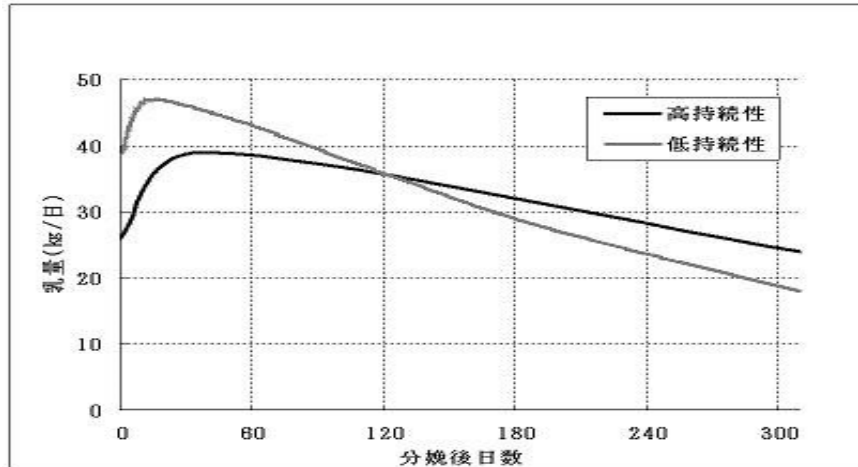
I. 特色ある酪農経営の支援

- 多様な品種による特色ある乳製品づくりを勧めます。また、体調を崩しにくく生産性の高い牛を作り、特色ある酪農経営を支援します。
 - チーズ適性の高さが特徴のブラウンスイス種、濃厚な牛乳が特徴のジャージー種など、希少品種の改良・増殖を支援します。
 - 海外の優良な受精卵を導入し、希少品種を効率的に生産します。
 - 希少品種の乳量乳質等を測定し、各農家が能力重視で次世代牛生産を行えるように支援します。

2. 現在主流のホルスタイン種について体調を崩しにくく生産性の高い牛をつくります。現状の高性能牛の飼養管理では、エネルギーバランスに問題があり、分娩後3週間は絶食状態と同じくらい身を削り、中後期には乳量が大きく減るので分娩時よりも肥り、過肥症候群・次産時の泌乳初期疾病の多発要因となっています。特に、種付け適期に最もコンディションが悪いので、受胎率が低下しているといわれています。

3. 乳量の変化の小さい牛（黒色線）は、大きい牛（灰色線）に比べ、同じ乳量でも体の負担が小さいため、農家は扱いやすくなります。

4. 泌乳ピークの乳量を抑え、かつ泌乳中後期の乳量の落ち込みを緩やかにすることは、乳牛の栄養管理の省力化や自給飼料多給型酪農を推進するのに役立つと考えられます。そして、乳用種雄牛評価成績に泌乳持続性形質が掲載されるようになりました。



5. このような泌乳曲線の改良に加えて、1頭あたり乳量も約1割向上を目指します。

II. 遺伝子解析技術を活用した能力評価手法の実用化

DNA解析技術等を用いた遺伝的的不良形質の排除、雌雄判別技術を活用した効率的な種畜の生産を推進します。

III. 飼養管理

乳用牛の遺伝的能力を十分に発揮させ、生産性を向上するためには、個体毎の能力や乳質、繁殖成績等を適切に把握する必要があることから牛群検定情報の活用を図るとともに、暑熱対策、良質な飼料や水の給与などによる快適性に配慮した飼養管理（アニマルウェルフェア）を推進するものとする。併せて、食の安全と消費者の信頼確保のため、HACCP方式の導入など衛生対策の推進が図られます。

主な数値目標

乳用牛<雌牛>	
乳量	8,000kg→9,000kg (+113kg/年)
乳脂率	4.0%→4.0% (+2.6kg/年)
S F N	8.8%→8.8% (+9.2kg/年)
乳蛋白質	3.2%→3.2% (+2.9kg/年)
初産月齢	26ヶ月→24ヶ月

<繁殖牛>	
初産月齢	24.5ヶ月→23.5ヶ月
分娩間隔	13.3ヶ月→12.5ヶ月
体型	体高130、胸囲190、かん幅520 (32ヶ月齢時体型)

<去勢肥育牛>	
肥育終了体重	725kg → 730kg
1日平均増体重	0.72kg/日→0.86kg/日 (約26ヶ月齢出荷に相当)

日産合成工業株式会社 学術・開発部